

## 第 13 回 J T B 交流文化賞一般部門最優秀賞「ひみつの夏休み」

広報 6 月号からの続き…

「ねえあっちいこ！」と、驚くほど自然に娘の手をとり、十万個の小さな木のボールでできた砂場に向かって歩き出す。娘も、抵抗なくついていく。

子ども同士の本能的な共鳴はすごい。ついさっきまで遊んでいたお姉さんお姉さんの輪の中に、娘は一瞬で溶け込んでいった。



子どもたちによると、児童数が少ないため、異年齢同士でもよく遊ぶという。先ほど娘の手を引いてくれた女の子は、「ちょっと待ってて、絵本借りてくる！」と言うと、あっという間に一冊抱えて戻り、平仮名と片仮名を覚えたての一年生らしく、一文字一文字をたどるようなゆっくりとした口調で、娘に読み聞かせてくれた。娘も静かに耳を傾けている。

ふと横を見ると、別の子たちが滑り台の表面に、しきりに木のボールを敷き詰めている。

「何してるの？」と尋ねた私に、「面白い滑り台だよ！」と彼らは言った。なるほど、ボールをのせることで、より勢いよく体が滑るのだろう。いつもここで遊んでいる地元の子どもたちだから知っている遊び方だ。男の子の妹だという小さな三歳の女の子までも、一生懸命ボールを拾う手伝いをしている。

実際、私たちの住む町から東京は、特急を使っても三時間以上かかるほど離れている。けれど、剣淵の子どもたちからすれば、本州にある東京と長野は距離感としては同じなのだろうな、と思いほほえましかった。

そうこうしているうちに、一人、また一人と、母親が迎えに来て、子どもたちが帰っていく。帰り際に男の子が、「また来てください！火曜日ならいると思うから！」と、私たちに向かって笑顔で言った。

「遠く離れてしまうからもう会えない」ではなくて、「また明日！」とでも言うような、軽やかなお別れ。

「うん、次の火曜日に、また会おうね！」と、言えたらいいのに…。胸がいっぱいで言葉につまった私は、「ありがとう！」と返すので精一杯だった。

閉館時間になったので、残っていた女の子と外に出る。駐車場に止められた、ピンク色のヘルメットがかかった自転車を見て、彼女が自転車通学なのだとわかった。迎えを待つ必要もなく、いくらでも早く帰れたのに、最後まで私たちに付き合ってくれたのだ。

彼女は自転車を押しながら何度もこちらを振り返って手を振り、私たちの姿が見えなくなる駐車場の端で、もう一度振り返って最後のさよならをしてから、自転車でまたがり走り去っていった。

母娘二人だけになってがらんとした広い駐車場に立つと、名前も聞けなかった子ども  
広報8月号に続く…